服のチカラ

世界を良い方向に変えていく

04 瀬戸内オリーブ基金とユニクロ

募金活動と、ボランティアの先にあるもの

MADE FOR ALL ユニクロ UNIQLO

世界を良い方向に変えていく

服のチカラ 04

瀬戸内オリーブ基金とユニクロ

募金活動と、ボランティアの先にあるもの

ユニクロのレジの周りに並ぶ、ポスター、パンフレット、そしてみどり色の小さな募金箱。

ユニクロでは、NPO法人「瀬戸内オリーブ基金」の活動趣旨に賛同し、2001年より支援活動をスタート。店頭に募金箱を設置し、みなさまから寄せられたご好意を、瀬戸内海沿岸地域の緑化につなげています。

募金の総額は？ 緑化はどれくらい進んでいるの？ お客さまに活動の結果をご報告するのはもちろん、一緒に伝えたいのは、活動の背景にある想い。今号では、「瀬戸内オリーブ基金」支援活動の過程・結果・想いをお伝えします。

ユニクロでは、支援活動の一環として、瀬戸内海の「豊島（てしま）」で、従業員によるボランティア活動を行っています。島で目（ま）の当たりにした過疎化や高齢化などの社会問題。そして、活動の積み重ねによって気づかされたのは、「環境活動＝緑化だけでいいのか？」ということ。

服を企画・製造・販売する企業として、果たすべき責任（企業の社会的責任＝CSR）とは何か？

環境や社会のために、できることから、まずは一歩踏み出してみる。そして、一緒に考える仲間を、少しずつ増やしていきたいと、私たちは考えています。

（ファーストリテイリング CSR部）

CONTENTS

04 小さなチカラのリレー
06 サクラ、サクラ
08 豊島少年
10 島、しま、シマ
12 ファインダー越しに見えたもの
14 瀬戸内オリーブ基金活動報告
15 ボランティア活動をゴールではなく、きかっけに

募金の行方（ゆくえ）
小さなチカラのリレー

ユニクロのレジの横にある小さなみどり色の募金箱。お客さまから寄せられた募金は、NPO法人「瀬戸内オリーブ基金」を通じて、豊島（てしま）をはじめ、瀬戸内海沿岸地域の緑化活動に役立てられています。また年に2回、本部やユニクロの店舗のスタッフからボランティアを募り、豊島で植樹活動も行っています。

募金活動も、ボランティアも、一つひとつ、一人ひとりのチカラは、とても小さいもの。でも、小さなチカラをつないでいくことで、緑豊かな自然をみんなで守ること、そして今まで知らなかったことへの「気づき」や、新しい行動への「きっかけ」に、つながっていくと考えています。

瀬戸内オリーブ基金とは…

有害産業廃棄物の不法投棄事件「豊島事件」をきっかけに、瀬戸内海の島々や沿岸部にかつての美しい自然を再生することを目的として設立された基金。2000年に安藤忠雄氏、中坊公平氏が呼びかけ人となってスタート。ユニクロは、当基金の活動趣旨に賛同し、2001年より店頭での募金活動や、豊島での従業員ボランティア活動を行っています。

高齢化や、環境破壊は、
日本全国のさまざまな地域で
深刻な問題になっています。
豊島でのボランティア活動は、
実はみんなの身近にある社会問題について、
改めて考える機会にもなっています。

助成先の検討

助成を希望する団体の申請書をもとに
調査を実施したうえで、必要に応じて
活動現場を訪れ、助成の可否を決定。
助成先の活動経過も定期的に確認し、
適正な募金運営に努めています。

小さなチカラのリレー、次はだれ？

豊島でのボランティア活動に参加したことがあるスタッフは、のべ500人。島で学んだこと、感じたことをそれぞれが持ち帰り、となりの誰かに伝えていくことで、小さなチカラのリレーは、続いていきます。

全国から集まる、ユニクロのボランティアスタッフ

ボランティアとして豊島に集まるのは、本部や全国の店舗で働く従業員と、その家族たち。ボランティアに参加すること自体が初めて、という人も多く、島の人に教わりながら、植樹、草刈りなどを行います。

9.5万本/100万本 瀬戸内海の植樹活動

瀬戸内オリーブ基金では、瀬戸内海沿岸やそこに浮かぶ島々に、合計100万本の植樹を行うことを目標にしています。現在、約9.5万本の植樹を達成。またオリーブだけではなく、地域の植生にあった植樹活動を行っています。

瀬戸内オリーブ基金運営委員会

月1回、弁護士、大学教授など、さまざまな分野の専門家のほか、ユニクロの従業員も参加する、瀬戸内オリーブ基金運営委員会を開催。助成先の検討や、「大きな木プロジェクト」など基金独自の活動についても、審議します。

瀬戸内オリーブ基金事務局

店頭で集められた募金は全額、NPO法人「瀬戸内オリーブ基金」に届けられます。事務局は香川県の豊島にあり、2名のスタッフが常駐し、運営にあたっています。

ユニクロのレジの横にある募金箱

募金箱に寄せられるのは、地球のこと、あるいは知らない誰かのことを想う、お客さまからのやさしい気持ち。これまでにみなさまから寄せられた募金の総額は155,018,694円にのぼります。

ユニクロでは、ボランティアスタッフが
「豊島 こころの資料館」を訪れる機会を設けています。
豊島事件で不法投棄された廃棄物の半分近くが
まだ現場に残っていますが、2000年の公害調停合意後、
「豊島・島の学校」や「豊島学（楽）会」など、
未来を考える場も生まれています。

基金独自の活動もスタート

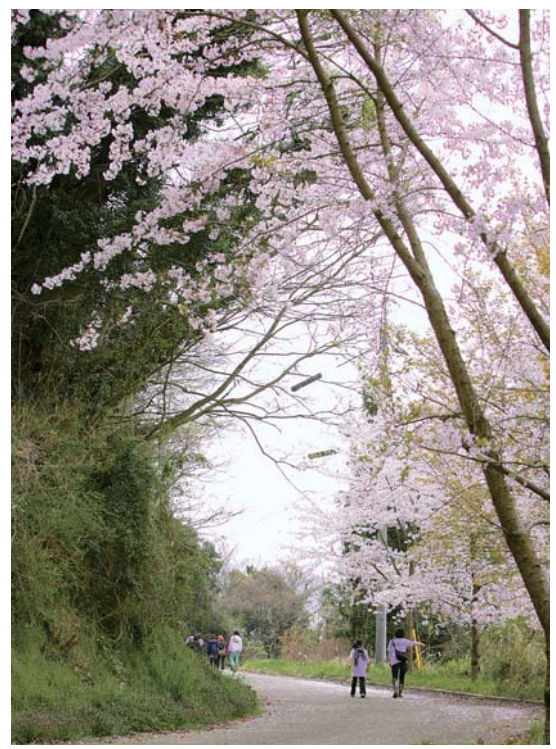
「大きな木プロジェクト」
地元の人・ボランティア・専門家・瀬戸内オリーブ基金が一体となって、
自然環境はもちろん、そこにあるコミュニティを守ることをめざす。
「海底ごみプロジェクト」
砂浜に打ち上げられた「漂着ごみ」とは異なり、あまり知られていない「海底ごみ」。
海底に沈んだ廃棄物の存在を広く知ってもらうために、
回収現場の学習会や、市役所のロビーで展示を実施。

サクラ、サクラ

「この坂道を登ると、全部の海がみえるんよ。」
山頂へ続く坂道の途中、島の人たちが、うれしそうな顔でいう。
満開の桜の下で、お弁当を食べながら、
愛おしそうに、さくらの花びらを見上げている。

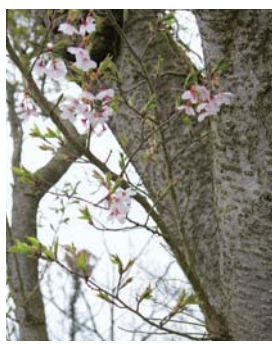
「桜がたくさん咲いたら、綺麗やろな」
桜並木は、香川県豊島の最高峰、壇山の山頂へ続く道が舗装されたとき、
地元のミカン農家の男性が植えたものだ。
20数年前から、一本、一本。5mから7mくらいの間隔で、
たったひとりで、コツコツと植えていった。
もちろん、その後の手入れもひとりで続けた。
いつか、その数は200本を超え、桜の道になった。
毎年、春がくると、島の人たちの笑顔が、そこに集まるようになった。
ずっと、ずっとその春が続きますように。誰もが、心の底からそう願っていた。

やがて、男性も歳を重ね、手入れをすることが難しくなってきた。
「自分が植えたから、やっぱり花は見たいけど。
もう、ひとりでは、どうにもならんでねえ。
続けてもらえたらいいんやけど。」
島の人たちの喜ぶ顔がうれしかった。
隣の島に住む、子どもたちとお花見をすることが楽しみだった。でも…
桜は、手入れもままならず、
いつの間にか道路わきの雑草に埋もれてしまっていた。
頂上へいく人もほとんどいなくなり、
道も、桜も雑草に覆われてしまった。



すっかり元気がなくなった壇山の桜並木。
そんなとき、若いボランティアたちがやってきた。
坂道の桜の周りを綺麗にし、舗装道路の先を覆っていた草を刈り、
道をもういちど描きはじめてくれた。
若者たちの純粋な情熱は、あきらめかけていた男性の気持ちに、
もういちど、勇気を与えてくれた。
「応援に来てくれたひとたちが、
こんなにがんばっとるんやから、自分たちが
ガンバらんでどうする！」
60代から70代が中心の島の男たちが、
蘇った道の先を歩きはじめた。
草を刈り、土地を整え、砂利を敷く。
同じ汗が滴り、同じ声で笑う。そして、進む。
若者たちの気持ちを次の世代にもつないでいくために。
もういちど、桜並木の下で笑い、
あの頂上で、子どもたちと、全部の海を見るために。

――そして、2009年、道はふたたび山頂に届き、
桜は新しい生命の蕾をつけた。
坂の途中、眺めの良い桜の下のベンチ。
満開の薄桃色の隙間で、小さいけれど凛とした力強い一輪ずつの花。
その桜の樹から樹を、誰かが、踊るように、歌うようにいう。
「来年は、これも、あれも咲くよ」
サクラ、サクラ。
彼らの心に咲いた花は、永遠に枯れることはない。



豊島少年

はじめてのボランティア 島の桜が教えてくれたこと

VOLUNTEER CLUB

「昔、僕がボランティアで整備した桜が、見頃になっているから、見てきてよ。」店長のそんな言葉に背中を押され、豊島（てしま）へやってきた。はじめてのボランティア。これまで、環境のことにも、社会貢献にも興味を持ったことがなかった。もちろん、会社が「瀬戸内オリーブ基金」という活動を支援しているのは知っていた。レジの横で、お客さまから募金をお預かりしていることも。ただ、正直に言えば、本当にその活動の深いところまで知っているかというと自信はないし、お客さまにも、パンフレットの言葉をなぞるだけで、活動の本質をお伝えできていなかった。本当にそれでいいんだろうか？ なんとなく、そう思っているところに、店長の一言があり、軽い気持ちで参加した。

島に上陸してから、少し時間があったので、町並みを歩いてみる。昔ながらの風情をたたえる漆喰（しっくい）色の家並み、威風のある石垣、きれいなみかん畑。少し坂道を登れば、青い海が見える。風が、少し強い。のどかで、みどり豊かな風景。日本の原風景。でも、なんだか、足りないものがある。違和感。その理由はすぐにわかった。人の暮らしの活気のようなもの。子どもたちの声も聞こえない。日本の少しだけ未来の姿が、ここにある。ふと考える。僕たちがめざすものは、木を植えて、みどりを蘇（よみがえ）らせることだけなのだろうか？ みどりが帰ってきたとき、そこに、子どもたちの笑顔があることが、大切なのではないだろうか？ だけど、僕たちに、何ができるのだろうか…。

バスにのり、話には聞いていた豊島事件の現場にむかった。歴史上でも、とても大きな有害産業廃棄物の不法投棄事件の現場を見せてもらう。ビニールシートに覆われた巨大な人工の灰色の山に圧倒される。この酷（ひど）い事件が「人がやったこと」であること、そしてそれに対する島の人たちの辛く、長い戦い。情報はいくらでも溢れているけれど、実際に現場に立ち、自分の目で見てみないとわからないことがある。この言葉にならない思いを、一緒に働くほかのスタッフにも伝えたい。そうだ、この写真を休憩室に貼ってみせよう！ 心に決めて、シャッターを切った。

オリーブ畑につくと、さっそく作業にとりかかる。土を掘り、苗を植え、水を溜め、また土をかける。雑草を刈る。やってみると、作業はほんとうに大変だ。くもり空なのに、玉のような汗がでてくる。慣れない作業で、手も痛いし、腰も痛い。いい若い者がといわれるかもしれないが、この大変な作業を、島のお年寄りがやっているかと思うと、ほんとうに、すごいというしかない。事実は厳しい。気持ちだけでは、どうにもならないのだ。

お昼は、店長がいっていた、壇山（だんやま）の桜並木のベンチで食べることになった。満開の桜。なんて綺麗（きれい）なんだろう！ 見とれながら坂道を登って、山頂へ向かう。この道は、ボランティアの整備した道の続きを、島の60代、70代の人たちが、草を刈り、山頂へつないだそうだ。山頂に立つ。青空と四方（しほう）の海、足下の濃いみどり。瀬戸内海の真ん中で、大きく深呼吸する。小さなチカラがつながり、見えたものは、自然であることの美しさだった。

島、しま、シマ

島に息づく、人・時間・自然との心地よい距離感。
瀬戸内海の島々の、いろいろな面を紹介します。

捨てないで！！

豊島では1978年から13年にもわたり
有害産業廃棄物の不法投棄が続きました。
当時は、国内最大の不法投棄事件と
言われていましたが、現在では最大「級」。
ほかの地域でも、全国各地で産業廃棄物の
不法投棄が見られることがうかがえます。

小豆島のオリーブ＆
無農薬の豊島レモン

瀬戸内海の名産品といえば、オリーブ。
特に小豆島産のオリーブは有名です。
またこの地域の温暖な気候は、
柑橘系の植物を育てるのにもぴったり。
豊島では、農薬を一切使用しない
国産レモンの本格的な栽培にも
取り組んでいます。

瀬戸内海の「魚」は最高!

瀬戸内海は、波が穏やかで栄養豊富。魚にとっても絶好の住まいです。
特に伊吹島周辺は、全国でも有数のカタクチイワシの名産地。
また、今では珍しくなったタイラギという貝も、瀬戸内海沿岸でとれて美味!

次世代に残したい
「小豆島農村歌舞伎」

香川県の小豆島・豊島・直島や、
塩飽諸島などの島しょ部には、
古くから歌舞伎の文化が根付いています。
特に小豆島は、上方との交流が活発で、
「歌舞伎の島」と呼ばれるほど、盛んだったとか。
小豆島中山の舞台では、今でも毎年10月に
「中山農村歌舞伎」が開かれ、
小学生から大人まで、
幅広い年齢層の演者が舞台に立っています。

かつての島の風物詩
「除虫菊」復活プロジェクト

最盛期には、栽培面積が200ヘクタールも
あったという小豆島の除虫菊。
しかし類似化学物質の原料が主流となり、
島での栽培は消滅してしまいました。
2009年、その除虫菊を復活させようという
プロジェクトがスタート。
2010年春には、見事な白い花を咲かせ、
かつての島の風物詩がよみがえりました。

瀬戸内海は世界の宝石

有名な教育学者・新渡戸稲造は、
瀬戸内海を「世界の宝石」と
称したと言われています。
彼だけでなく、昔から国内外問わず
さまざまな人々が、この地を訪れ、
海の島々の美しい景観に、
また四季折々の表情に魅了されています。

おじいちゃん、おばあちゃん

65歳以上の高齢化率が50%を超える島があり、
都市部に比べると、過疎・高齢化が進んでいます。
最近では、こうした島々の活性化につなげようと、
芸術祭の開催や、さまざまなボランティア活動、
交流イベントが実施されています。

瀬戸内海アラカルト

◎「瀬戸内海」、どこまで入る？

瀬戸内海は、本州・九州・四国の3つの島に囲まれた、日本唯一の内海です。「瀬戸内海」という呼び名は、明治初年頃に「The Inland Sea」の翻訳語として用いられたのが始まり。東は大阪から西は大分まで、1府10県が瀬戸内海に接し、点在する大小の島々は7００余。岩礁なども含めるとその数は3０００とも言われています。

◎ 物語の舞台

高松の沖合に位置する人口２００人の島「女木島（めぎじま）」は、別名「鬼が島」とも呼ばれ、昔話「桃太郎」に登場する鬼のすみかとして知られています。また、香川県三豊市には、「浦島太郎伝説」が今も残り、その名の通り浦島神社をはじめ、玉手箱を開いたことに由来する「箱浦」などの地名もあります。

◎ 海の番人は海賊衆

中世瀬戸内では、「海賊衆」が社会的影響力をもっていたと言われています。干満の差が激しく大小さまざまな島が密集し、複雑な潮流を生み出す自然条件を巧みに利用して、「海賊衆」は往来する船から通行税を徴収したり、有料で水先案内や警護をしながら、内海を取り締まっていたようです。

参考文献 『ふるさとの海 瀬戸内の人・町・暮らし なぎさの記憶』『瀬戸内海事典』

ファインダー越しに見えたもの

中野正貴 // なかの・まさたか

1955年福岡県生まれ。1980年フリーランスフォトグラファーとして独立。以来、数々の雑誌表紙撮影や広告撮影で活躍。変貌し続ける人口過密都市、「東京」の無人の「瞬間」を追い求め、10年余の歳月をかけ撮影した写真集「TOKYO NOBODY」はベストセラーに。2001年写真集「TOKYO NOBODY」により日本写真協会賞新人賞受賞。2005年写真集「東京窓景」により第30回木村伊兵衛写真賞を受賞。

高松港から小型高速船に乗り込み30分程のクルージングを楽しみながら香川県の豊島に向かう。19世紀の欧米人達に感嘆の声をあげさせたという伝説的な多島美に興奮し、シャッターを押しつづける指がなかなか休まらない。瀬戸内海は世界でも稀な内海の景勝地である。500種を越す魚類が生息する豊かな漁場と糖度の高い柑橘類を育てるのに適した段々畑、稲作づくりに必要な涵養水を育む森林など、水陸共に自然の恩恵をたっぷりと受けている。

そんな素晴らしい環境に恵まれた島々の一つである豊島で我が国最大級の有害産業廃棄物不法投棄事件は起きた。1978年にひとりの民間事業者の手によって始められた不法な投棄はその後13年に渡って続けられ、総量66万8千トンの有害産業廃棄物が野焼きされ地中に埋められた。土地は汚染されゴミの焼却によって発生したダイオキシンが海に流れ出し、周辺の生態系に悪影響を及ぼした。『汚染された魚を食べさせるわけにはいかない。』これは島で話を聞いたひとりの住民の言葉だが、彼はこの想いを強く胸に抱き漁師を辞め反対運動に身を投じた。1975年に業者が申請をしてから、住民達は25年の長期に渡って全国的な反対運動を展開し、大都会の廃棄物が過疎の島に持ち込まれている現実を訴えた。2000年に住民達の長く熱い闘いが結実し、公害調停が成立して産廃の無害化撤去が始まった。そして今後も跡地利用が終わり完全に緑が戻るまで見守り続け、この問題を後世に伝えるために彼らは現在も闘い続けている。ショッキングなのは、この青く澄んだ雄大な大自然を目の前にしてでさえ人間はこのような愚かな行為を犯してしまうという事実だ。この事件は大量生産、大量消費を美徳とする高度経済成長時代の社会背景の中で、大量に排出されたゴミの処理が環境に与える影響に無関心な人間と、金のためなら何でもするという人間が結びついて起こったものだが、経済が豊かになり物が消費される社会である以上、今後も世界各地で同様の事件が起こりうる恐れがあることが懸念される。

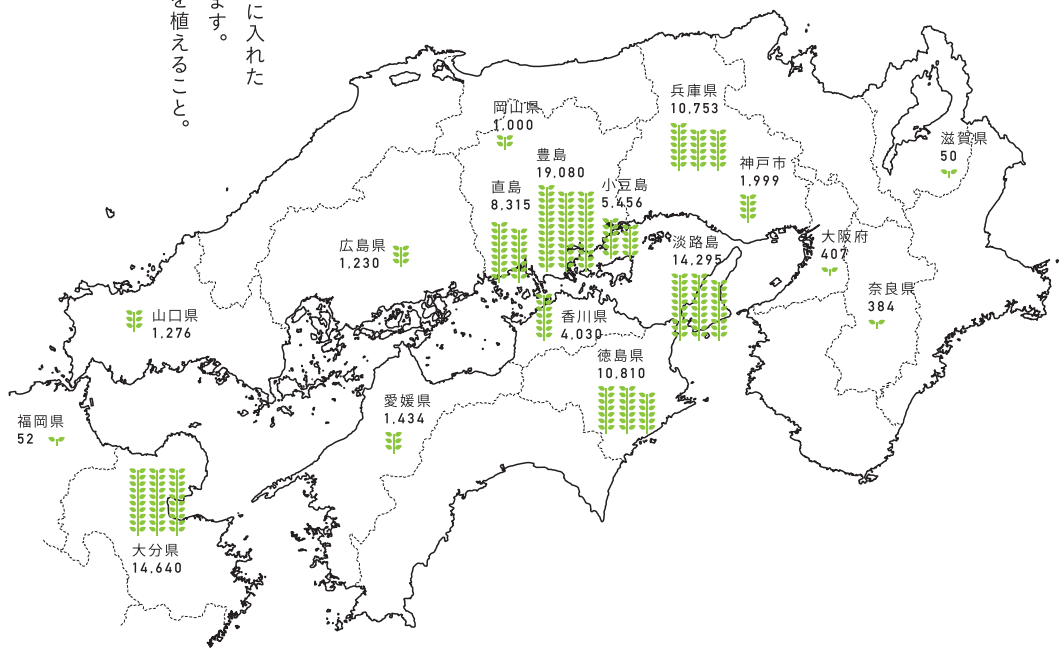
現在豊島では、この事件によって荒廃してしまった島の自然を回復させるために、2000年からオリーブ等の樹木の植樹がボランティアによって行われている。ユニクロはこの基金の活動趣旨に賛同し2001年から支援を始めたが、この事件を知らない若者達が実際に現場を訪れ自分達の手で自然回復の手助けをする意義は大きい。しかし植樹するだけで、実際の大変な栽培作業はやはり島民達の日々の弛まぬ努力がないと育たないというのが現実なので、今後はその問題も含めてボランティア活動の方向性が問われてくると思われる。ともあれ、瀬戸内の風景は神々しく穏やかで人間が自然と共存するために必要な地球サイクルでの調和とは何かを諭してくれているような気がした。

オリーブ基金より

設立から10年。
瀬戸内海の美しい風景を
この先も、ずっと。

瀬戸内オリーブ基金活動報告

2010年、瀬戸内オリーブ基金は、設立してから10年目を迎えます。みなさまからのご理解・ご支援により、瀬戸内海沿岸の地域に約9万本の樹木を植えることができました。また植樹だけではなく、海底ごみの「見える化」プロジェクトや、地域の活性化も視野に入れた「大きな木プロジェクト」などにも取り組んでいます。目標は瀬戸内海沿岸や島々に100万本の樹木を植えること。これからも、ご理解・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。



ただいま
95,211本

お預かりした募金金額
155,018,694円

（2010年5月31日現在）

助成の対象となるプロジェクト
- 植樹助成
  環境保全／緑化植樹
- 学術・環境教育助成
  希少植物対策

助成先
- 助成の対象となるプロジェクトを行う団体・個人
- 学校などのクラブ活動・町内会
- 公益的な活動を行う個人

2009年度の主な助成プロジェクト
- 尾道空き地再生プロジェクト～20年後には自然な森に～（広島）
- 除虫菊復活プロジェクト（香川県）
- 「行常しあわせの森つくり」2009年プロジェクト（兵庫県）
- 久住桜の森づくり（大分県）

募金・助成に関するお問い合わせ：瀬戸内オリーブ基金事務局
TEL.0879-68-2911　FAX.0879-68-2912　info@olive-foundation.org

ボランティア活動をゴールではなく、きっかけに

ユニクロが「社会貢献室」を立ち上げたのは、2000年のことです。時を同じくして、安藤忠雄氏、中坊公平氏の呼びかけにより設立された「瀬戸内オリーブ基金」の活動趣旨に賛同し、当社として初めての社会貢献活動として、店舗での募金活動を開始。従業員による植樹ボランティア活動も始めました。

支援を始めて10年目となった今年、お客さまからの募金金額は、1億5千万円を超え、植樹本数も10万本に近づいてきました。当初は、「とにかくたくさん木を植えればいい」、「すぐに100万本を達成できる」と思っていましたが、実際に従業員が現場で植樹ボランティア活動を体験することで、オリーブだけではなく、その地域ごとの植生にあった植樹・植林活動を行う大切さを学びました。また地域の方たちとの交流を通じて、日本のどこの地域にもある過疎や高齢化などの問題についても考えるきっかけとなりました。

現在、ユニクロは、月に1回開催される瀬戸内オリーブ基金の運営委員会に従業員が参画し、お客さまからお預かりしたご好意がどういった活動に使われるのかを、最後までしっかりと確認をしています。また、「豊かな自然のある美しいふるさとを子どもたちに残したい」という瀬戸内オリーブ基金の活動趣旨を再確認し、企業として、今後どういった支援活動ができるかを考え続けています。

私たち一人ひとりにできることは限られていますが、今回の小冊子「服のチカラ」を通じて、環境問題についてともに考え、ともに行動できる仲間を増やしていくことで、大きな動きに広げていきたいと考えています。

引き続き、みなさまのご支援を賜りますようお願いいたします。

アンケートへのご協力をお願いいたします。

ファーストリテイリングでは、「服のチカラ」についてご意見・ご感想をお待ちしております。みなさまからご意見をいただくことで、改めて自社の取り組みについて見直し、今後の活動につなげていきたいと考えております。アンケートハガキにご記入のうえ、ご返信ください。みなさまからのご意見をお待ちしております。

「服のチカラ」は、ユニクロ店頭のほか、右記WEBサイトからもご覧いただけます。

「服のチカラ vol.1」
障がい者と働くということ

「服のチカラ vol.2」
HEATTECHが生まれる場所

「服のチカラ vol.3」
全商品リサイクル活動

「服のチカラ vol.4」
瀬戸内オリーブ基金とユニクロ

URL:http://www.fastretailing.com/jp/csr/

FAST RETAILING

「服のチカラ」vol. 04　発行元：株式会社ファーストリテイリング　www.fastretailing.com/jp/csr